

音楽と生活

吉永誠吾

Music and Life

Seigo YOSHINAGA

(Received September 2, 2002)

The 1999, the junior high school *Course of Study* in music issued by the Ministry of Science and Education states in the teaching plan, "As for *wagakki* (traditional Japanese musical instruments), use at least one type of *wagakki* through three years of junior high school music education." From this statement, we can fairly say that the "excessive emphasis" on classical music in postwar school music education has now shifted, focusing on understanding and respecting traditional Japanese music such as folk songs, festival, ceremonial and local music.

In a way, even though I am a classical music (violin) specialist, I have often warned that music education in Japan seemed to place too much emphasis on classical music. I would never deny the value of classical music, however I mean that we should not ingest only classical music in school education. Therefore, I have been suggesting that by understanding the environment of the particular regions of "music," we learn about ethnic identity and various emotions toward music.

Now school music teachers are in a dilemma mainly because most of them have essentially learned the disciplines of classical music and few have a mastery of traditional Japanese musical instruments and its development. Furthermore, another fundamental problem in Japan is that not only classical music but also traditional Japanese music are not familiar to the common people. In other words, both kinds of "music" are confined to particular artists and specialists.

Thus, in this paper, I shall propose my ideas and methods on how traditional Japanese music will become part of our everyday life by showing an example introducing an activity using hand-made musical instruments and *wadaiko* (Japanese traditional drums) to children.

Key words : music, life, hand-made music instruments, wadaiko

はじめに

文部科学省の新しい中学校学習指導要領(平成10年告示)の『指導計画の作成と内容の取り扱い』の中に「和楽器については、3学年を通じて1種以上の楽器を用いること。」となっている。これまでの音楽の授業が西洋音楽に重きが置かれてきたことに対する反省から、もっと我が国や郷土の伝統的な音楽文化を理解し、尊重しようとする方向に変わったということができる。

筆者自身、これまで度々、西洋音楽中心の教育をある意味で批判してきた。それは決して西洋音楽の良さを否定するのではなく、鵜呑みにしてはいけないという意味であった。その音楽が発達した気候風土や生活習慣を理解し、それぞれの民族の考え方や感じ方の特徴をとらえようとする努力が必要であるということを主張してきた¹⁾。

現場の教師にとってはさまざまな戸惑いが生じているに違いない。何故ならば、大部分の教師

が西洋音楽中心に学んできており、和楽器に精通している教師はほとんど例外的といっても過言ではないと思われるからである。しかも西洋音楽と同様に、我が国の伝統的な音楽も、わたしたちの生活の中にそれほど広く深く溶け込んでいるとは考えられない。しかし、筆者は本論文で和楽器を取り入れることの是非について議論をするつもりはない。むしろ我が国の伝統的な音楽を人々の生活にどのようにして溶け込ませたらよいかということについての試論をここで述べようとするものである。

I 音楽が目的そのものになり得るか

1 音楽の起源

筆者は既に、音楽が人間の感情のコミュニケーションの役割を果たすということを度々強調してきた。ここでもう一度そのことを、これまでに述べられた音楽の起源に関する諸説から確かめたいと思う。

音楽の起源について、岸辺成雄氏はそれを環境論の立場からと形態論の立場から考えることができるかと述べている。

(1) 環境論

岸辺氏は環境論から考えることのできる九種類の学説を挙げている。

①言語抑揚説

ルソーやH. スペンサーらの説で、言語の抑揚が歌に移ったとされるもの。

②進化論説

ダーウィンは動物が異性をひきつけるために発する鳴き声が人間の場合に進化して歌となったと主張した。

③感情表現説

民族心理学者ヴントらの説で、自然民族が感情の高まったときに発する音声・言語が歌になったとする。

④脈拍説

人間の本能に音楽の起源を求める説の一つで、生理的本能として脈拍がリズム感を生んだとする説。

⑤信号説

自然民族が遠距離の間を大声で信号しあう声が歌を生んだとする説。

⑥集団労働説

集団労働のときに力をそろえ、あるいは元気を出すために発する掛け声、あるいは物を打って起こるリズムに起源を求める説で、K. ビューヒャーが有名。

⑦子供の歌唱から類推する説

赤ん坊の泣き声や歌から原始音楽の発生過程を類推する方法で、H. ウェルナーらが唱えた。

⑧魔術説

民族学が発達し、芸術の起源が原始宗教に関係あることがわかり、自然民族における音楽の魔術的役割が大きいことに注目してたてられた説。J. コンバリュエーらがその代表。

⑨考古学的研究

考古学資料にもとづいて論じられる範囲にとどめるのが正しいとする説。

(2) 形態論

上記の環境から起源を論ずる諸説に対して岸辺氏は、例えばヴァラシェークが提唱した、リズムと旋律のいずれが先かとか、歌と楽器の発生順序、楽器では何が最初のものかなど、音楽の形態から論じたものがあるとしている²⁾。

いずれにしても音楽の起源については、これらの説のどれか一つだけで論証することは不可能である。むしろこれらの諸説が総合されて考えられるべきであろう。ただ一つ言えることは、どの説にしてもそれが人々の日常生活、特にコミュニケーションの役割と密接に関係していることである。したがって私たちの日常生活から切り離して音楽を考えることは不可能である。

2 音楽は目的そのものになり得るか

上記で述べたことから、音楽が他の目的の手段となることなく、目的そのものにはなり得ないということが理解されるであろう。

音楽は非言語コミュニケーションの手段として最も大きな力を発揮する。ショーペンハウアーやトルストイも述べているように、音楽の表現するものは喜びや悲しみなどの私たちの感情そのものなのである。さらにバーンスタインが述べるように、音楽は言葉ではとても表し得ないような深い感動をも表現することができる。このように考えていくと、感情を表現していないものは音楽ではないということになる。私たちが人通りの多いところを歩いていくと、あちらこちらの店からさまざまなBGMが流れてくる。もしある人がそのようなBGMのなかのあるものに心をとめるとすればそれはその人にとっての音楽となり得るが、そうでないものはもはや音楽とは言えず、単なる雑音に過ぎなくなる。

音楽を演奏する側からも同じことが考えられる。ある人の演奏が聴衆に深い感動を与えれば、それは音楽と言える。逆に、聴衆に何の感動も与えないのであれば、それは音楽とは言えない。ここに、演奏者側に大きな責任が生じてくる。すなわち、音楽家は単なる音の塊を伝える技術を学ぶのではなく、聴くものの心に深く訴えることのできる技術を学ばねばならないのである。となると音楽家にとって最も大切なものは、単なる演奏のテクニックを訓練するだけに終わるのではなく、物事を深く考え、感じることのできる知性を育むことこそが大切になってくる。そのような知性がある初めて、その音楽は聴く者の心に深い感動を呼ぶのである。音楽はコミュニケーションである。だからコミュニケーションの成立しない音楽は音楽とは言えない。

II 音楽と生活

今日の音楽教育が抱える大きな社会的な課題として、国際理解とともに、我が国日本人のアイデンティティが問われている。その意味では諸外国、諸民族の音楽に親しむとともに、我が国の伝統的な音楽を重視することは正しい。しかし、いきなり邦楽器を取り上げることにはいささか戸惑いを禁じ得ない。どの分野に限らず、音楽の演奏はそれが芸術といえるほどのものになるまでには、毎日、長時間の練習を重ね、数年はおろか、数十年にわたって培われるものであろう。音楽教育がそのようなものであればあるほど、普通の子供達からは音楽は縁遠いものになっていく。だから、学校教育においてそのような高いレベルの教育目標を掲げて邦楽器を授業に取り入れようとしているわけではないことは了解できる。むしろ生徒達が少しでもそのような邦楽器に親しみ、日本人として我が国の伝統音楽に、より多くの親しみを感じる事が目的であることは言

うまでもない。

もともと義務教育における音楽教育というものは、ある一部の専門的な音楽家を養成するためにあるのではない。そうではなく、将来さまざまな職業に従事するであろう人々の人生が、音楽によって潤い豊かなものになるためにあると言えよう。しかし、そのためには音楽が人々の、あるいは子供達の手の届かないようなものであってはならない。そのような意味からも、もっと簡単に子供達がすぐにでも取り組むことができ、しかも日常生活に密接に結び付いた音楽教育の方法があるかもしれない。そのような方法として筆者は次に述べるように、手作り楽器と和太鼓を用いる方法を提案したいと考えている。

筆者が現在取り組んでいる手作り楽器及び和太鼓については、東京芸術大学音楽教育研究室発行の『音楽教育研究ジャーナル』第13号にエッセーとしてその一部を紹介させていただいた。これは熊本大学教育学部音楽科に平成11年から大学院修士課程を発足させ、それとともに筆者の大学院における授業『教材開発』の中で取り入れているものである。

1 手作り楽器を用いて遊びから音楽へ

(1) 手作り楽器の指導とそれを用いたコンサート

手作り楽器に関する参考資料としてはこれまでに次のようなものをそろえている。

- ①手づくり教材・教具…筒石賢昭、『教員養成大学小学校課程用音楽科教育法』、音楽之友社
- ②手作り楽器と音楽…石水修二、『小学校音楽教育講座第7巻、音楽科基礎指導法 | 器楽 |』音楽之友社
- ③土笛の音楽と楽器作り…橋本龍雄、(小島律子・澤田篤子編、『音楽による表現の教育』、晃洋書房)
- ④音遊人の音作り…『手づくり木工事典』No. 32, 33, 34, 婦人生活社
- ⑤『よく鳴る紙楽器』…繁下和雄著、クレヨンハウス
- ⑥『音をだして遊ぼう』…東山明監修、藤原義勝編、明治図書
- ⑦『やさしい竹笛』…天上昇著、中央アート出版社
- ⑧『竹でつくる楽器』…関根秀樹著、創和出版

以上である。『教材開発』の授業では繁下和雄氏の『よく鳴る紙楽器』の中に紹介されている「メロディパイプ」, 「スライドホイッスル」, 「二連ホイッスル」及び、繁下氏がNHKの教育テレビ『やってみよう何でも実験』の中で紹介した「紙製アルペンホルン」などの他、トイレットペーパーの芯やカメラのフィルムケースに穴を空け、ストローをセロテープで張り付けた笛などを製作した。さらに筆者は竹を用いたフルート、ケーナ、リコーダーなども製作している。竹のフルート(バンブーフルート)はアルトリコーダーと同じへ長調からそのオクターブ上のへ長調まで13の調の笛を完成させた。現在はハ長調のバンブーフルートのレとミの指穴を、市販のリコーダーと同じく二つ開け、半音階が吹けるものを完成させた。これらの手作り楽器は子供のみならず大人も、その好奇心を大いに刺激されるようである。大学の公開講座、音楽の先生方への講習会、幼稚園、小学校の家庭学級における講習会などで手作り楽器の指導を行っている。

手作り楽器を用いたコンサートも行っている。これは例えば通常のバイオリンやピアノなどの演奏の間に手作り楽器の演奏を挟むようにして行っている。大学院の学生であれば、音感がよく発達しており、例えばカメラのフィルムケースやトイレットペーパーの芯で作った笛などでもピアノ伴奏に合わせてやさしい童謡などを結構、上手に吹くことができる。このほか『浜辺の歌』, 『早春賦』, 『ヤシの実』などをバンブーフルートと弦楽器のアンサンブルに編曲し、コンサート

で演奏した。このようにして子供達に音楽への興味関心を高めさせ、遊びから音楽への道を示してあげたいと考えている。難しい演奏や華やかな演奏だけを子供達に聴かせても子供達と音楽との距離は縮まらないであろう。子供達が「これなら自分にもできそうだ」と思わせることが大切であると考えている。これまでに幼稚園、小・中学校、老人ホーム、市民センターなどでコンサートを行ってきた。

(2) 音は環境である

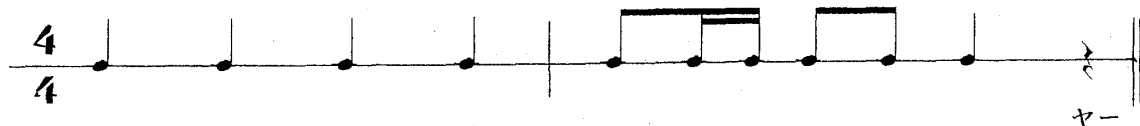
手作り楽器の指導は筆者が担当する「生活科教育」の中でも、教材として取り上げている。一般的にクラシックの音楽は勉強の能率を上げるとされるが、例外もある。例えば筆者にとっては、バイオリンの音楽を聞きながら本を読んだり、あるいは論文を書いたりすることは不可能である。なぜなら筆者はどうしてもその音楽を聴いてしまう。つまり、そのバイオリニストがどのようにその曲目を解釈して演奏しているかなどということがどうしても気になり、その結果、自分の本来の仕事に専念できないのである。

このように音は人間の精神作用に微妙な影響を与えている。したがって、筆者が担当する「生活科教育」では『音は環境である』をメインテーマに、授業を行っている。まず、音が人々の精神活動に与えるよい影響、悪い影響を取り上げる。次に、悪い影響を与える音は単にストレスの元になるばかりでなく、子供の精神的な成長にも影響を与えることを学生達に考えさせ、「作ろう。探そう。すてきな音」をサブテーマに学生達がそれぞれすてきだと思った音を発表させる。したがってもちろん楽器だけを作るわけではないことは言うまでもない。

2 和太鼓の実践

筆者が附属幼稚園長を併任したおり、後援会（PTAにあたる）のある役員から、お祭り太鼓をやるので笛を吹いてほしいとの依頼があった。筆者にとっては全く経験したことがないことなので不安はあったが、承諾した。そのお祭り太鼓は次のような構成であった。まず、「附属幼稚園おやじ太鼓！」の掛け声の後、リーダーに合わせて乱打を行う。次にリーダーの合図とともに全員で基本となるリズムパターンAを演奏する。頃合いを見計らって、筆者がお囃子を入れる。このときに使ったフレーズが譜例1である。筆者はこの譜例の中から好きなものを自由に選び、自由自在に組み合わせたり繰り返したりしながら演奏した。このAのパターンが続けられる中で次第にテンポを上げていく。しかし、リーダーは時々、上がり過ぎたテンポを大きなしぐさとともに、もとのゆっくりしたテンポに戻す。適当な所でリズムパターンBが入る。これは全員がパターンAを演奏している中にリーダーがBを演奏し、最後の「ヤー」の掛け声を合図に全員がそろってBを演奏する。やがてリーダーの合図とともに全員が音量を下げ、たたく場所も革のところから縁の部分に移す。ここで筆者が「追い分け節」を演奏する。その「追い分け節」が譜例2である。もちろんおおよそこのようなイメージであって厳密にこの通りに演奏したわけではない。例えば、3連音符のところは、むしろこぶしといったほうがよい。「追い分け節」が終わると再び音量を増し、テンポも速くなり、最後は乱打となる。乱打を終えてからリーダーが大きな音でゆっくり三つたたいて、その四つ目の拍に全員が「ヤー」の掛け声を発してこの曲を閉じる。お祭り太鼓は筆者の園長在任中、夏祭り、運動会、餅つき大会など、後援会の行事のたびに演奏した。自分で言うのも恥ずかしいが、大変好評であった。

西洋音楽の世界では楽譜に書かれた通りに演奏するのが一般的な常識と言えるであろう。しかし、このようなお祭り太鼓では厳密な楽譜があるわけではない。あるパターンを続けているうちに適当にこの辺で次のパターンに移るのだとか、極めて自由であり、ほとんど即興に近いもので



リズムパターン B

追い分け



譜例 2

ある。この自由さは演奏するものにとって、とてもわくわくするような興奮がある。

現在、筆者の住んでいる地域で子供達とその保護者に呼びかけ、このお祭り太鼓を復活させようと計画している。最初の呼びかけには思いがけないほど多数の子供達とその保護者が集まってきた。このような試みに対して大いに興味をもっている人が大勢いることを思わせた。集まった子供達の中にはかなりの数の幼児も含まれていた。そこでA、Bともに楽譜で示す一方、右手の“み”，左手の“ひ”を使って、例えばパターンAは「み、みひ、み、みひ、み、みひ、み、ひ」と口で唱えさせながら右手、左手のリズム打ちを覚えさせた。

『音は環境である』という考え方は小学校の生活科教育や、小・中学校の総合学習の時間においても取り入れることができるであろう。学校週休二日制の施行に伴い、音楽の授業時間数も減らされている。むしろ音楽はその枠を乗り越えて教科の壁を取り払い、他の教科との連携を図りながらより大きな可能性を發揮できるであろう。音楽は単にリズム感や歌唱、器楽などの音楽本来の能力だけを育てるだけに終わっては、その存在意義を示すことはできないであろう。その意味からも筆者は手作り楽器や和太鼓の活動を広めることによって、音楽教育の可能性を広げたいと考えている。

Ⅲ 音楽は表現する喜び

人々はだれでも自分の心にあるものを外に向かって大きな声で叫びたいと思っている。お祭り太鼓をやってみたいと思う人が多かったのもそのことを表している。高度なテクニックで裏打ちされた西洋音楽の優れた演奏もそれはそれで価値がある。しかし、そのようなことはごく限られた一握りの人々にしか許されていない。大部分の人々は、表現したくともそれを表現するテクニックがないためにカラオケに自己満足の道を求めたり、歌に自信のない人は表現することそのものをあきらめてしまっているのかもしれない。

その意味からも、手作り楽器とお祭り太鼓の活動は、今後大きな可能性を秘めていると言えよう。手作り楽器は子供達に音楽をもっと身近なものに感じさせるであろう。和太鼓は高度な技術がなくとも音楽を表現する喜びを満喫させることができるに違いない。いきなり和楽器に取り組みより、いったんこのような方法を試みた後で、自分たちの伝統的な音楽とは何かを考え、さらにそのような考えを発展させる方法として、和楽器の導入を考えるのがより自然に思われる。

子供達の中には表現することそのものを躊躇している者もいるであろう。今、我が国で大きな社会問題になっている不登校、いじめ、校内暴力なども、表現することそのものができずにそのような問題を起こしているものが少なくないと思われる。事件を起こした多くの青少年が、幼少年期に非常に屈折した育ち方をしていることはまさにそのことを示している。筆者らの活動は音楽を演奏したり鑑賞したりすることだけが目的ではない。子供達が積極的に自分を表現することができるように、それとともに、他の人と協調して何かを行ったり、あるいは他の人へのおもいやりの心が育ってくれることを念じつつ活動していこうと考えている。

引用文献

- 1) 拙著、『音楽とコミュニケーション』、熊本大学教育実践研究、第19号、2002年2月、p.66~69
- 2) 世界大百科事典、3、1964年11月、平凡社 p.663-664